桂影舎露葉編『葛濃阿楚飛』

伊藤善隆

はじめに

本稿は、桂影舎露葉編『葛濃阿楚飛』（文化元年刊、個人蔵）を翻刻・紹介するものである。

露葉は、大坂の美濃派俳人である。別稿「桂影舎露葉編『かゞみ餅』」（『立正大学大学院紀要』第38号、令和4年3月）でも触れたとおり、東武獅子門、すなわち江戸の楚石坊の門人で、享和から文化・文政期にかけての活動が確認できる。

本書は、巻頭に置かれた哥仙行の前書に「ことし卯月はじめて楚師に見え侍る」とあるとおり、露葉が初めて師の楚石坊に面会した記念の集である。露葉の自序に「予も遠き浪花にありながら、年ごろその風教をしたひて文通に此道の交りをむすび」とあるから、それ以前は、文通によって師事していたことが判る。

前掲別稿にも記したとおり、これまでの東武獅子門研究は、おもに楚石坊の師である玄武坊以前の事象が問題とされており、楚石坊が注目されること自体があまりなかったといってよい。そのため、露葉も研究の俎上に置かれることがなかったのである。

したがって、楚石坊の俳諧活動や露葉の伝記的事跡、あるいは大坂における東武獅子門の活動を明らかにしようとすれば、本書はその基礎資料となる文献である。ここに翻刻・紹介する所以である。

なお、本稿で使用した底本の裏表紙見返しには「山市亭」と墨書があり、山市亭梅志（武蔵国多摩郡五日市村の東武獅子門俳人、本書「十五」オに入集）の旧蔵本であることが判る。

〈付記〉

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)「化政期俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号　18K00296 代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

〈書誌〉

書型……刊本。半紙本一冊。楮紙、袋綴じ。

表紙……朽葉色布目原表紙。縦二二、一cm×横一六、〇cm。

題簽……原題簽、中央無辺。「葛濃阿楚飛　浪花露葉撰」。

版式……無辺無界。毎半葉八行十八字内外。

字高……一五、三五cm（序文初行「そも〳〵事は」を計測）。

刊記……「蕉門書林京寺町橘屋治兵衛板」。

柱刻……上象鼻に柱題「葛」、下象鼻に丁付。ただし、丁付は初丁（扉）になく、第二丁以下に「二」～「廿七」とある。

丁数……全二七丁。

その他…裏表紙見返しに「山市亭」と墨書。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。

異体字等は、概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに」をつけ、（　）内にその丁数、および表・裏（オ・ウ）を示した。

虫損のため、推測で読んだ箇所は右側に「（虫損）」と添えた。

参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

〈翻刻〉

葛濃阿楚飛　浪花露葉撰　」（表紙・題簽）

（白紙）　」（表紙見返し）

浪　華

葛　能　遊

桂　影　舎　輯

」（扉オ）

序

そも〳〵武江は俳諧に有縁の風境たる事は、むかし二祖ふか川の芭蕉庵にて茶話禅といふ録をあみて祖翁の行状をあらはし、我家の風雅をひろめんと十論を草稿し給ひけるより、今や東武に獅子門の栄へ、月に添ひ日にまして、道に古老の人〴〵も少なからねば、予も

遠き浪花に」（扉ウ）ありながら、年ごろその風教をしたひて文通に此道の交りをむすび、渭江の情をも寄せ侍りしが、今年は師室に旅寐の笠をかけて、棒頭に二十年の夢を覚し、日夜の談笑には貴賓高客とも膝をならべ、その座その時の俳かいをさへ、もらす事なく書記して桂影舎に常什物の数に入れしが、さるをおのれ一分の観に備へて紙虫を肥したらんは、此道におゐて浅ましきわざ」（一二オ）なるべければ、それが中より百が一を撰み出して、師坊に再応の点検も乞はず、梓にちりばむる事にはなりぬ。是よし聞達を当時に求んとにはあらで、隔なき人〳〵の交情にむくはんの微意なればならし。しかして、是が標題を定めんとするに、むかしより詩歌連俳の集作る事、そのかたち定りてその名あるべし。名ありてかたちなきものはあらじとこそ。爰において軸の一句の」（一二ウ）おもむきに随ふべしと、ある一座の衆議にまかする事しかり。

文化改元のとし　桂影舎露葉

七月

［桂影舎］（刻陰）［露葉］（刻陽）

」（一三オ）

哥仙行

兼て文通の教示はうけながら、ことし卯月はじめて楚師に見え侍るに、道にまことの懇情より帰る事をさへ忘れて

露葉

謹で聞く日となりぬほとゝぎす　楚石坊
空の茂りを隠れ家のはれ　玄二坊
茶の水も風呂も筧に事足りて　有声
二とせ三とせ立つは夢の間　千里
奉公に出る子へちから付てやり　柏舟
心いはひの膳に干肴　麓遊
稲（ウ）の穂の実入も月の秋なれば　常山
わたる小鳥の音も風ほど　麦里
うそ寒い寺を後住のうたてがり　葛路
痛む疝気に腰のおし灸　其詠
陸まではされども遠いかゝり船　支園
墨絵のよふな雪の明ぼの　如嬰
烏帽子着て真顔な祢宜の神迎へ　葉
袖ひき合ふてわる口の連れ　石
出た跡のしばしはゆれる管簾　二
残る夕日の影がちら〳〵　烏林
戻りまで花見の酔がさめかねて

」（一四オ）

畔ぬる鍬に泥の飛汁　一声
二ヲ
春もたゞ今は名のみに鳥羽の里　戸明
戸は明て居て内は留守なり　里
のびるとて蕎麦のむかひのあとからも（虫損）　声」（ウ四）
角ミ前髪の足も韋駄天　遊
どの岩もみな滑らかに苔垣衣　舟
清水の果が川に漲る　麦
異見にもさま〳〵老の譬へ言ト　山
欠びかくして肩をもむ娵　詠
もの音がやんで幽かに鐘の声　路
見えすく月もはづかしの森　嬰
脇向ていはぬ恨みの露しぐれ　園
置た扇が裾にもつるゝ　林
二ウ
のぼり下りすれば二階もはしご坂　一
桶で足らねば鉢も雨漏　明
眼鏡さへはづさず祖父のうかりひよん　葉
碁に負腹もたゝぬ夕暮　舟
虚に実に尽ぬ遊びも花の下ト　二
したしみ長き柳連尭　声」（ウ五）

名録

打かけの西王母あり桃のけふ　千里
もの音も隣をへだつ若葉哉　有声
ひろ過た座敷を譏る寒さかな　柏舟
十六夜や宵には消えじ松の影　麓遊
ほとゝぎす翦て落けり月の弓　烏林
のどかさや馬にも夢をのせて行く　戸明」（オ六）
海の底あふる硯の氷かな　麦里
行年や一すじは又春の道　其詠
打水を上手にはづす蜻蛉かな　如嬰
身ひとつにおもたき尻や蝸牛　常山
涼風の土橋をまたぐ青田かな　一声
ほそいのは孫に引かせる大根かな　支園
蟻も塔積んで見せけり夏木立　葛路
蝶〳〵や牛の背中を嗅で行く　露葉」（ウ六）
若芝や的の翦矢もうはすべり　楚石坊

朝日庵

今や此道に高名の聞えある朝日庵をおとづれて　露葉

夏に又頼む影あり夏木立　玄二坊
明けて涼しさ見せる柴の戸　蘭香
悟つても茶の湯の媚は捨兼て　風里」（オ七）
さすがに若い心なりけり

駕籠の翠簾まいて遥に淡路島　柳後
松の梢に秋のそよ〳〵　器水
十五夜はいつでも晩稲の花ざかり　鷺白
新酒なればと神棚へ神酒　思鳳

右表八章
名録

おもむろに風をうごかす芭蕉かな　玄二坊
向キ〳〵に咲や畠のゆりの花　鷺白
隙かけて咲に短かしけしの花　蘭香
しからばと帯ほどかるゝ粽かな　風里
はつ汐やしらりと岡へゆりこぼし　女　如菊
凩や月のさし込む地蔵堂　柳後
咲てから鉢もにほふや蘭の花　思鳳
寒さにも長短がある氷柱かな　器水
長閑さや尋る先キも〳〵留守　仙児
縫針に行燈とり巻く(虫損)師走哉　露葉
梢から麦へも下りて青あらし　楚石坊」（オ「八」）

花水亭　前文略

言の葉もこのよふにとの茂りかな　露葉
訪れて明ける窓の梅雨はれ　有声

茶話亭　前文略

うち解て咄さふとての端居かな　露葉
団扇にまるき風も幸　千里」（ウ「八」）

浦和駅
藍花井

年ころ文通の風交より、兼てしたはしかりし藍花
井に笠を脱て

尋得し軒や心も五月ばれ　露葉
竹の子も出て待つ杖の友　以中坊
観音の利生は朝といふからに　此秋
鐘のひゞきも峯に聳える　里松」（オ「九」）
二位殿をはじめ八嶋へ落支度　李風
女房を叱り〳〵喰ふ飯　志明
焚立る煙りに椽の薄月夜　芦舟
枝ぶり程に生らぬ柿の木　夏幸

右表八章
名録

月も追ひなくして戻る螢かな　以中坊
野心もまだ芽のふかぬ余寒かな　芦舟
折れば手に針のとがめや茨の花　此秋」（ウ「九」）

水くさき空のけしきや啼く蛙　野有
神棚も留守とは見えぬ玄猪かな　雨幸
凍解て泥に裾ひく柳かな　羽白
菜の花や裾のかくるゝ麦の丈　志明
関守りも空はとがめず八巾　夏幸
着せ綿に大根おろしの菊味かな　李風
どの山の風や流れて花筏　里松　」（オ十一）
落る日の狂ふや瀧にちる紅葉　露葉
実にくろく秋も寂けり蕎麦畠　楚石坊

三朝舎　前文略

夏菊に預けておかん旅の杖　露葉
汲まば清水をいざ裏の山　里松

師室に逗留のいとま、ある日、爰の人〻とともに東都に名高き勝地を」（ウ十）尋ねありきし時

東叡山　清秋仙　露葉

甍ならべし玉の光に
名さへ上野ゝうへもなきより
真如の影も池にすみては
耳に塵なき鐘もひゞきし

芝浦　月下仙　戸明

須广に似ぬ芝浦や
風はあれど浪しづか
見わたせば秋はれて
月の中に安房上総

日暮里　万葉韻　曲嶺仙　葛路

月に高きも花にひくきも　肝
道は草履にたどり安さを　竿
遊ぶ心に山もあるより　頼
里の名にあふ日は暮すらん　蘭　」（ウ十二）

両国橋　飛花仙　塘雨

水ならで来て淀む
橋にあまる人の足
漕ぐ舟を織と見れば
川にさへ秋のにしき

浅草寺　三五七言　巣古仙　烏林

塔は　金龍の　名よりそびえて
鐘は　世の中の　音に聞くらめ　」（オ十三）
されや　ふだらくと　爰を仰げば
花に　紅葉ある　秋の夕ぐれ

諸国集韻

けし咲や麁相して行く簑の袖　東都　文東候

螢から焚付に来て蚊遣りかな　年路
水打て暑さを砕く涼みかな　再花
寄る波の影もおぼろや浦の月　其音
おさゆれば団扇もひかる螢かな　松旭　少年
襟元ト に風のからまる頭巾かな　丹瓢
吹ぬ日は風のうごかす柳かな　葵水
立つ鳥も羽音あはせる鳴子かな　千鶴　女
いつぱいに春をふくむや年の梅　五嶺
白梅やこぼす薫りも雪のうへ　吹風
何所までも蛙の声やおぼろ月　如臼
さま〴〵に匂ふ木挽の蚊遣りかな　吾舟

「十三」オ

仝

着る葉さへ持たで淋しき冬瓜哉　柊里
行鳫や磁石の針の向たかた　嶌雪
模様ほど木の葉ちらすや薄氷　芦吹
藁をうつ音さへ消えてかんこ鳥　百峩
反橋に日脚のすべる雪解かな　溟洲
岩角に露の下陰や苔の花　瓢花
春なれや野をも袂につみこぼし　青牛
歯に若き音はありけり干大根　蕉雨
萩咲や露のおもさも提て知る　止敬　尺
五月雨やおよいで出たる丸木橋　硯露

「十三」ウ

蘇鉄にも菰かぶらすや冬籠　鉄子
恐ろしい声でしたふや猫の恋　夏夕　女
こぼしてはくむ月影や水車　白雅　仝
四角なる中へ丸寐の紙帳かな　里杏　仝
虫干や空をながめてほして居る　素文　仝
冷てから井戸をほめるや真桑瓜　戦風
秋立や濡て気の付く瓦家根　花候
松風と後ろ合せや冬ごもり　幾月
秋立や横になりたる寐心も　鉄鼠
夜が明て化をあらはす踊かな　可候
餅つきやまづと上座へ敷く莚　兎江
稲妻や野中でひらふ家ひとつ　素月
袂から匂ひこぼすや木の芽つみ　文花
菜の花や咲けど主なき荒畠　一口
風に乗り雲に遊ぐや風巾　巨柳
濁り江の水涼しさや杜若　利川
人の居た跡ちよつと掃く団扇哉　有麦
降れば又ふる気に遊ぶ月見かな　鏡裏坊　吉見
常に見ぬ石も世に出る汐干かな　桃宜
雪に寐る稽古や雨のことし竹　夕口　石戸
所〴〵春のにじみやつく〴〵し　梅志　五日市
垣結ふて仕廻へばはなす柳かな　野口

「十四」ウ

「十四」オ

「十五」オ

菜の花や汁につみても咲ほどは　松二
若いから杖をたよりや菊の花　二宮 有隣
畑打や鍬の影から日もゆるみ　小川 扇歌
すき間から風のさゝやく夜寒哉　志計
野中ゆく我影ひとり暑さかな　福生 松風
夏菊の莟やふえてかたつむり　大間木 其滴
葉桜や蝶も毛虫に成てゐる　夏朝
若草に古葉は交ぜぬ焼野かな　伊苅 白水
森の火のおり〳〵消えつ露時雨　八木崎 米家
萍や住めば都の水のうへ　板橋 止白
娵入をのべてことしも踊かな　赤塚 詞友
藪入や朝寐の隙を夜べのはし　南河原 傘叩
鷺の跡澄してうごく田にしかな　下川上 志立
さゞ波の岸へとゞかぬ氷かな　練馬 右保
陽炎や柳の糸により合せ　由之
常はない嶋の生るゝ汐干かな　笹目 幸雨
やさしさも野に際立つや女郎花　領家 思仙
若竹や隣の松と背くらべ　南畑 宗古
留守の戸に的のはづるゝ乙鳥哉　井沼 雨朝
雨はれて飛石涼し苔の花　貝塚 秋水
寐がへりの耳に夜寒や鳫の声　壬戸 潮水
内までも簑の雫や五月雨　遅夕

（「十五」ウ）

竹の子や仲間はづれに隣へも　雨柳
広過て虫も寐に来ぬ芭蕉かな　下総佐倉 馬耳坊
蟻いくつ莟をめぐる牡丹かな　雨吟
蚊遣り火やかゆい所へとゞき兼　女 遊花
ゆるがして庵おどろかす野分かな　小蓑坊
戻る時折る気になるや山桜　上総小糸 兎園
月影も障子に凄き寒さかな　蝶二
酔た気で寐て腹の立つ新酒哉　烏旭
蜻蛉やおさへてとまる草の風　甲斐郡内 寛里
まだ暑し秋の声なき峯の松　笑草
照る月に雨の寐言や啼く蛙　鏡睡
家なみの揃はぬ里や桃の花　随化
雨音の寐耳にたまる夜寒かな　栄里
鳥の巣や世はさま〴〵のくらしかた　相模藤野 雪川
秋立や暑さを削る風の音　子貫
出がはりや十日ばかりの律義もの　麦峩
もの影もなくて涼しき青田かな　駿河府中 湖月
はつ鳫や秋も最ふ実の入た声　女 里秋
畑うちや野遊びに火をかしてやり　仝 露葉
松風に暑き日もあり蝉の声　仝 桃枝
おどろいて天窓のさはぐ蜻蛉かな　播广山崎 竹眠
昼がほや相手に奈良のさらし臼　季柳

（「十六」ウ）

（「十七」オ）

（「十七」ウ）

（八）

鎗梅やあぶない窓へ月の影　糸染
櫛入れぬ風に暑さや夏柳　女　野菊
白菊や雲には月のかくれても　安志　松夢
娵も出て輪に足す盆の踊かな　紀伊新宮　柏亭
行春や霞も消して走り船　瓠酔
蝉や草をわければ土の中　佐渡新穂　梅壮
凩や枯ぬ木の葉に荒て行く　北方　北洋
菓子やらん子達あまへなけしの花　秋湖
水くみや盃ひらふ桃の岸　越後堀ノ内　徐々坊
うぐひすのはつ音聞く日や庭静か　新潟　文華
水茶屋の軒も荒てや秋の風　新発田　許一
影法師もそはず静におぼろ月　燕　花兄
春なれや寐ても気味よき花を夢　津川　柳志
片耳を夜着から出して千鳥かな　出羽新庄　文東
分別を終い寐て仕廻ふ巨燵かな　芋葉
蜻蛉や日傘の紋について行く　花渓
涅槃会や山も笑はず薄がすみ　湖東
おく露もそなへの数や星祭り　秋田　可口
鯱に日はかゞやきてしぐれかな　梅之
杣小屋のけむりは厚し秋の暮　尺兎
吹ながら風も音なき若葉かな　夏吹
名月や甘露も降らば此夕部　長門府中　子輶

取てある鞍壺へ来てきりぐ〜す　再馬
五月雨やきのふにかはる釣瓶縄　素鳳
瓦家もふいて和らぐ菖蒲かな　赤間関　蓁之
長き日や牛のあゆみに名もたゝず　石見大森　里鶯
稲づまや観念の目をおどろかし　延里　里明
霜の夜や杖であやしむふる草鞋　土江　芦江
下ヶつ上ヶつ浮世の塵を春の風　越前金津　二逐坊
猿引の鞭に折行く野梅かな　府中　五中
すへかけて灸ぎらひの寒さかな　福井　李青
蛤や家うる身にも城をふき　為卜
梅折ればおしむに似たりものゝ蔓　豊後日田　雨芳
鶯もまだ気短かなはつ音哉　備後上下　北窓
目じるしはそれと地蔵の清水かな　肥前長崎　里美
いざよひや闇より月にひゞく鐘　阿波徳島　蓼花
我恥もつゝまずいふて年忘れ　豊前小倉　座朝
はつ汐やしほやく竈もうくばかり　信濃松本　茂柳
けしからぬ虻のさはぎや花ざかり　出雲加茂　楚白坊
湖に春のあつまるおぼろかな　讃岐多度津　博和坊
思ふ事いふてのけるが雉子の声　京　薺芽
落てある花にて知るやはつ茄子　安芸広島　如風
紙雛や神代の恋のやつれ顔　大坂　蒼〻
あの山の裾を廻るかはつしぐれ　左栗

白椿咲や葛屋の夕けむり　　帆二

盗む気を花にもはぢる野梅かな　　美濃六ノ井　古梁坊

右之発句は居虚亭に旅寐せし時、例の文庫に勧進して此たびの飾りとなすのみ

蝶も出て日向をひらふ小春かな　　楚石坊

摂州多田の温泉にて

羽ぬけ鳥啼や藪もる温泉の匂ひ　　露葉　」（「廿二」オ）

旅中の吟

八ッ橋

葉に狂ふ水も蜘手やかきつばた　　露葉

鳳来寺

若葉にも瑠璃のひかりや夕日山　　仝

秋葉山

杖たてゝ連待つ岨や青あらし　　仝

小夜ノ中山

うぐひすや念仏石に老を啼く　　仝　」（「廿二」ウ）

大井川

川越しとすれ違ひけり鮎の鰭　　仝

宇津ノ山

ほそ道をわけ兼て啼かかんこ鳥　　仝

三保ノ松原

立ながら図を引て見る扇かな　　仝

箱根山　　」（「廿二」オ）

峠越す汗も入日や花卯木　　仝

はからずも、師室にて、はじめて長府の素鳳雅公にまみゆる事をよろこびて

涼しさやむすぶちなみも此木蔭　　露葉

同じ麓に清水くむ連れ　　素鳳

浪花なる露葉の主と、居虚亭にて」（「廿二」ウ）風雅の交りをむすびしは、水無月の末なりけり。程なく帰国の用意と聞くに、我も急キの用の出来りて、ひとまづ古郷へ旅立んとするの折なりければ

昼がほやかし合ふ影も笠の中　　越後行脚　友和坊

一樹一河も涼む日の縁　　露葉

ことし卯月の末には師室に笠を脱て諸風子に見はやされ、文月のはじめには師室に笠を着て人〳〵に見送らるゝも」（「廿三」オ）此道に此交りの厚ければならし

送別三物　各前文略

わかれても又待つ空や鳫の文　　有橋

こゝろは月に残るむさし野　　露葉

渺〳〵と薄も花の波立て　葵水

其二

扇おいて尽ぬわかれをおしみけり　恵十

言はでうつむく萩に夕月　露葉

光るほどなをさら露に秋寂て　楚遊

」（ウ廿三）

其三

蜻蛉も笠見送るや戻り旅　一歩

月に薄に忘られぬ跡　露葉

下冷へぬ通夜の霊夢の尊くて　柏舟

其四

馬の尾にわかるゝ門や秋の蝿　一桃

残る暑さにのこる言の葉　露葉

恋の謎月の一首に解かねて　有麦

」（オ廿四）

其五

又逢も星をたとへの別れかな　仰之

まねく姿も月に梶の葉　露葉

踊さへ後ろ崩れに輪のぬけて　蕉雨

其六

蓮の実も飛んで送るや秋の風　亀林

声笑はれん立つ跡の鳴　露葉

看経も願い此功徳月さして　止敬

」（ウ廿四）

其七

朝顔や旅立つ朝をくらいから　寄連

月ものこりて明おしむ空　露葉

呰の中へ鶉の高声に　葛路

其八

蜩に日をだまされな旅の空　馬骨

月を心にわかれ路の木〴〵　露葉

秋の風おと沙汰なしに落すらん　一口

」（オ廿五）

其九

まだ秋も居馴染ぬ間にわかれ哉　蘇慶

さそふ一葉も旅笠の連れ　露葉

悟ても月はむかしの月にして　在江戸　寛里

其十

錦とも見るや花野を戻り旅　紀伊在江戸　巴漣

虫の轡も月にいさめば　露葉

鎌倉の代は又秋も染立て　在江戸　子貫

」（ウ廿五）

留別

年来の志願、時至りて師坊をはじめ、文通に此道の交りをむすびし人〴〵にも面会をとげ侍る事、我において風雅の本懐といふべく、かつは俳諧の面目といふべし。されば、予が帰国の名残をおしまんとて、今日は師室につどひ給ふ東都の諸君子

に見送られて

笠にうれし月もあづまの空のはれ　桂影舎　露葉　」（オ廿六）

送別

摂港の桂影主人や、ことし夏も若葉の青み立つ頃より、秋も一葉のちりそめるおりまで、東都に逗留のいとま、ある日は我草庵に行かへりて、ある日は窓の下に鐘をかぞへて日の暮るゝにおどろき、ある夜はともし火の前に鴉を聞て夜の明るを恨しも、なを交りのあき足らぬより、けふのわかれの、いとほいなくぞ覚へ侍る。されや世の中の人にはくづの松原とよみけん風雅の寂をもしたひて、互に俳かいのひくみに」（ウ廿六）遊ぶ身なるにぞ足らぬ日をうらみや

葛の遊びにも　楚石坊　」（オ廿七）

蕉門書林京寺町橘屋治兵衛板　」（ウ廿七）

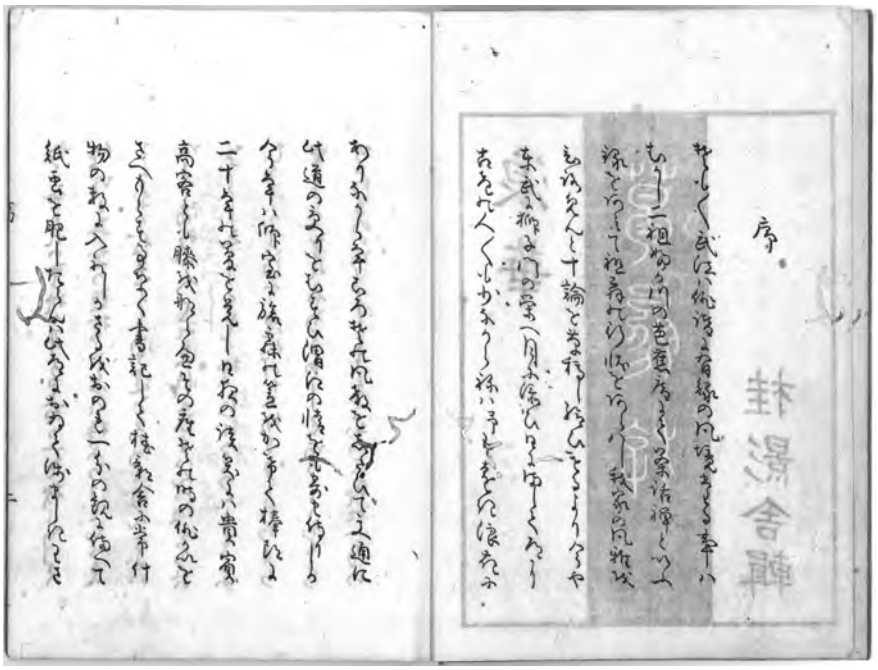
山市亭（墨書）　」（裏表紙見返し）

〈参考図版〉

1. 表紙

2. 扉（扉オ）

3. 序文（扉ウ・「二」オ）



4. 序（「二」ウ・「三」オ）

5. 本文巻頭（「三」ウ・「四」オ）

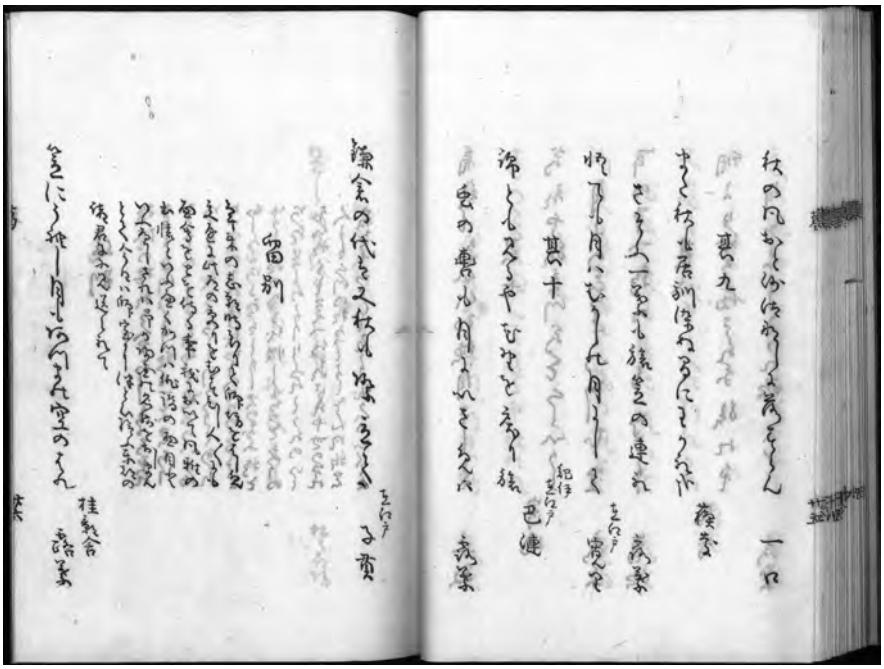
6. 本文（「六」ウ・「七」オ）

7. 本文（「十」ウ・「十一」オ）

8. （「十一」ウ・「十二」オ）

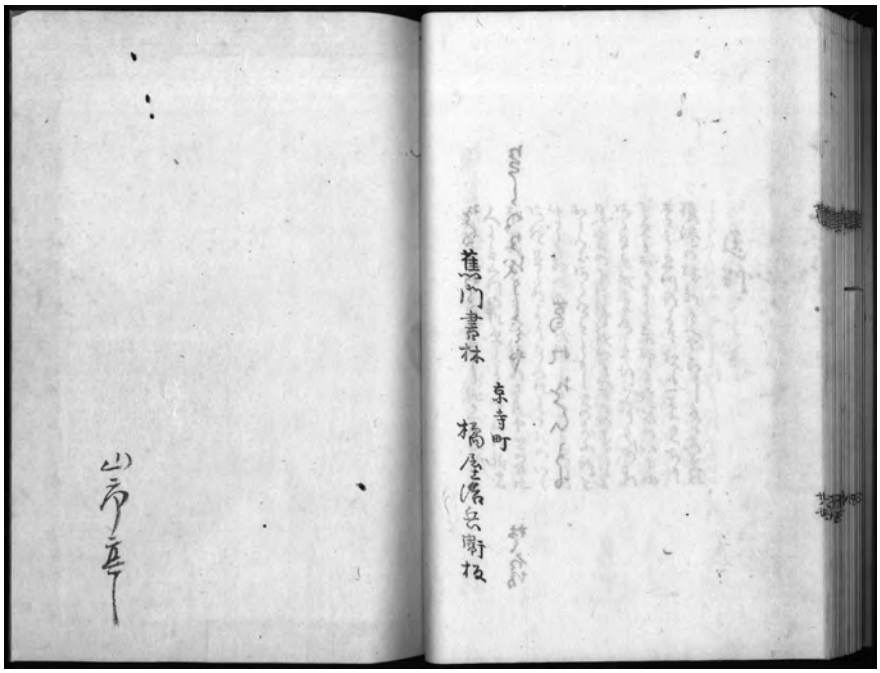
9. 本文（「十二」ウ・「十三」オ）

10. 本文（「廿五」ウ・「廿六」オ）



11. 本文末尾（「廿六」ウ・「廿七」オ）

12. 刊記・旧蔵者署名（「廿七」ウ・裏表紙見返し）



（二〇二一年十一月二十六日受理、二〇二一年十一月二十九日採択）